

---

# **としょコイ。～閉店営業図書室と、集いし若人たち～**

熊川修

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

としょ「」。～閉店営業図書室と、集いし若人たち～

### 【著者名】

熊川修  
N4681Z

### 【あらすじ】

市内唯一にして中高一貫のマンモス校、県野学園。

そこに通う高等部一年生、赤城高雄は図書委員である。

彼は今日も来訪者皆無な図書室にて、孤独な当番活動に勤しんでいた。

しかしある日の放課後、図書室前の廊下にて一人の女子生徒と出会う。

彼女は出会つて早々、なんとも不思議な疑問を彼に投げ掛けてきた。

「トーストじゃないのですか?」と。

その日を境に、これまで閉店営業状態であった図書室に彼女が通うようになり、本の貸し出しまで行われるようになる。

そして彼らは一冊の本と出会った。

舞台は現代。ちょっとびりおかしな日常系学園ストーリー。

その少女との出会いは、まったくの偶然であった。

いや、運命と云ふものが本当に存在するならば、それは必然の予定調和だったのだろうか。

彼女との初めての出会い、その場所は学園の図書室前の廊下だった。

彼女は問うた。初対面の彼に向かって。

普通の出会いであれば、おそらく訊ねる者はいないであろう質問をぶつけてきた。

「トーストじゃないのですか？」と。

彼と彼女が会話らしい会話をしたのは、図書室の中であった。正確には、図書室に備えられた図書室のテーブルを挟んで。

彼と対面の椅子に腰掛けていた彼女は、ひざの上に置いていたその本をテーブルの上に置いた。

そして最初の見開きページを開き、無表情のままその小さな口を開いたのだ。

「この本は意味がわからません」

少女はそつそつと歩き、かれこれ数時間は眺め続けたであらひページを撫でた。

全ての本には、それが書かれた理由があつて然るべきだ。  
だけど、もしさうであるならば。

### 「？」の童話

表紙にそう記された、その本は。  
何のために、誰のために生み出されたのだろうか。

季節は冬。

いつの間にか意味が履き違えられて恋人たちの祭典となつたクリスマスが過ぎ。コタツにミカンでのんびりと過ごす正月を越し。またしても恋人たちの祭典であるバレンタインも視野に入ってきた二月の初め。

時刻は放課後。夕方前。彼こと、赤城高雄あかぎたかおは学園内の図書室にて読書に勤しんでいた。

彼が今そうしている理由を簡単に説明すると、まず一つに学園内というのは彼が学生だからだ。

市内唯一にして中高一貫のマンモス校、『畠野学園』の高等部一年生……それが彼という人間の、現在の肩書きである。

さらに理由を一つ、なぜ図書室なのか。

答えは簡単だ。彼が図書委員だから。そして今は図書委員の受付当番としてカウンターの中に座っているといつ、実に当たり前な理由からである。

おまけにこの場所はストーブを完備している。窓の外で極寒の風が吹きすさぶ中、室内プラス暖房器具というのはそれだけでもう極楽浄土。

それに加え、この場所は非常に静かである。その静寂さは心地よく、本の中に広がる世界へ没頭するにはうってつけだ。

いや、図書室だから静かなのは当たり前だというわけじゃない……言い方を変えるとしよう。閑散としている。彼以外に誰もいない

のだ。もつともそんなことは今に始まつたことじやなく、彼にとつてはもう慣れっこなわけだが。

「……暇だな

彼は誰に話しかけるわけでもなく、もつ何度もかわからぬいその言葉を思わずつぶやいた。

だからつて状況が変わるわけじやない。そんな魔法が存在するならば、ぜひとも知りたいものである。

広げていた本を閉じ、あぐびを一つ。

受付は人が来ないんだからやることが無い。

本棚の整理はそもそも本が動かされていないんだからやることが無い。

新しい本の入荷なんてまだまだ先の話。本当にやることが無かつた。

何をすればよいか少々悩み、結局何の答えもでなかつたので引き出しからトランプのセットを取り出してその作業を始める。委員として不真面目だと困くじらを立てる人もいるだろうが、精密機械じやないのだ。四六時中真面目に振る舞うといつのも疲れ果ててしまふ。たまには息抜き位いいだらう。

「今日は三段目まで行きたいですねー……つと」

自分の両手先に細心の注意を払い、彼はトランプでタワーの建設を目指してカウンターの上にカードを立てていく。

図書委員というのは暇なのだ。他の学校は知らないが、少なくと

もの」の学園に限っては忙しいという言葉とは程遠い。「」の図書室に人が来ることは稀であった。受付の担当として毎日のようにこじく来る彼以外、誰も寄りつかないのがもはや日常。委員としての仕事はほとんど無い。無いに等しいのだ。

「一段目完成……っ」

震える手先を気合で黙らせ、いよいよ緊張感高まる三段目へと突入した瞬間だつた。

本を読みに来る者など皆無な図書室の開かずの扉が、レールを外れそうなほどの勢いでもつて開かれたのである。底抜けに明るい女子の声と共に。

「うーーっす！ 遊びに来てやつたぞタカー！」

「あ あああああああ……！」

現実は非情である。どれほどの努力をして、それが報われるとは限らない。懸命に積み上げたものが、一陣の風によつて吹き飛ばされることがある。

たとえば、彼の目の前で崩壊したトランプのタワーのようだ。

「ほ、僕のスカイツリーがああああ……！」

「なーにをこの世の終わりみたいに叫んで……なんだ？ 一人で神経衰弱でもしてんのかオメー」

もはや怒る氣力すら失せ、彼はただ深いため息をつく。不可抗力だ。目の前の女子には悪意は無いのだから。まるで修行僧のよう自身にそう言い聞かせて。

だけビリしだけ不機嫌そうに答えてしまつのは仕方ないだらつ。

「ハルナさん……何をしにいらっしゃいやがつたんですか」

「んだよ、その言い方。用がなきやダチのトロに来ちゃいけねえつての？ 冷たいねえお前さんは……」

やれやれというジェスチャーの後に、彼女は手にしていたハンバーガーをひと口でたいらげる。

片手に提げている巨大な紙袋。その中には彼女がたつた今食べ終えたのと同じ物がぎつしりと詰まつていた。

「いや、そんなつもりは……つていうかいいの？ 生徒会長がこんなトコで油売つてて」

「まだなつてねえんだから頭に新をつけろつて。いいんじやねえの？ 生徒会室で待つてたところで、ビーセヒマなんだし」

「あつそ……」

適当な受け答えで会話を切り上げ、高雄はカウンター周辺に散らばつたトランプ達を拾い集めていく。

すぐさま拾つのを手伝ってくれたのは、彼女の素の優しさからだらう。

出来れば扉を静かに開けるとか、彼としてはそっちの方で気を使つて欲しかつたのだが仕方ない。

「ほい。これで全部か？」

「みたい……だな。ありがと……で、それは一体なに

傍らに置かれたいい匂いを漂わせるハンバーガー満載の紙袋を指差し、高雄は尋ねた。

そして彼女は真顔で答える。きょとんと。

「オメヒ……目、大丈夫か？ ハンバーガーに決まってんじゃん」「そんなことは訊くまでもなく分かつてる……僕が訊いてるのはだな」

「ああワリい。せついやチーズバーガーも半分くらい混ざつてたわ」「そこじやないって……質問してんのはさ、なんでそんなに大量に、それもこの場所に持つて来たかつてこと」

質問し、それに答えながらも彼女は食べるという行為にストップをかけようとはしない。

それを止めたなら死ぬとでも言つかのよつこ、包みを広げては食べる動作を繰り返していた。

「大量つてまた大げさな……小腹が空いたから買つて来て、ヒマだったから食べながらここに来ただけだつたの」

「小腹……ねえ」

喋りながら食べ続ける。いや食べながら喋っているのか。

まるで豆菓子でもつまんでいるかのような軽快さで、常人であれば一、二個で主食になるはずであるうそれを次々と嚥下していく。もはや咀嚼しているのかすら疑わしい。

「一応、図書室内では飲食禁止なんだけど」

「いいだろべつに。読みながら食べてるワケじやねえし、『ノリ』せんと片付けるからや」

「しかし生徒会長が校則を守らないうつのも……」

「新をつけるっての……かたえこと書つなつて。あれだ。会長特権の前借りついでやつだ」

自分が言った台詞が面白かったのか、彼女はケラケラと笑い、そして食す。

彼女はいつもいつもなのだ。食欲旺盛、天真爛漫。彼女のために生まれた言葉ではないかと思えてしまつほびだ。

葛城榛名かつらぎはるなというその女子生徒は、高雄より一つ上の先輩にして幼少時からの幼馴染である。

彼らの会話で話されるようにこの春から彼女は最上級生となり、さらに高等部の新たな生徒会長となることが決定している。

六尺に迫るうかという高身長は高雄を超えて、がさつで喧嘩つ早く、並の男子よりもよっぽど男らしいかもしない。

けれどその見た目は内面に反比例するかのように実に女性のそれである。

腰まで伸びる、彼女の元気さを現したようなハネ氣味の茶髪。

パツチリとしていて凛々しい表情を良く映す瞳。高身長と相まってモデル顔負けのプロポーション。

高雄と一年しか違わない年齢でありながら、既に外見のあらゆる要素が大人の女性として固まっていると言つていい。

無論、外見のみで生徒会会長などになれるほど甘くはない。

けれど彼女はまるで人の上に立つために産まれてきたのではと思うほどの、天性のカリスマとでも言つべき厚い人望を得ていた。

それに加えてこれまた天性のと言える生徒会期待のブレーンまでが彼女の味方なのだから、学園内選挙での勝利は約束されていたようなものである。

「なんだよタカ。なんか元気ないぞ？……あ、もしかして腹減つてんのか。食うか？」

「いや、いい。ハルナ見てるだけで、もう胃もたれしそうなほど……」

「ハンバーガーのピクルスと、チーズバーガーのピクルス、どっちがいい？」

「両方もれなくピクルスじゃないか……ありがとう。いらないよ」

「そつか……だつたらさ、遊ぼうぜー。暇で死にそうなんだよあたい」

い

会話を切り上げてトランプ片手にカウンターへと戻りうとする高雄だったが、彼女が逃がすはずがなかった。

カウンターにうづぶせて、まるで幼児のように駄々をこね始める。いつものことではあるが。

「ハンバーガーに夢中になつてればいいんじゃないの？」

「じゃあ食べながら遊ぼう。よし決定つ……パパ抜きからいくか」

気付いたときには高雄の手からトランプの束は姿を消していた。ハンバーガーを食べながらも瞬時に、気付かれず奪い取つたらしい。まるで忍者のような気配の消し方だと高雄は思い、そしてため息をついた。

「はあ……いいの?」

「あん? 何が……あ。実はお前、『トランプの魔人』とか巷で噂されるほどで、そんな俺の真の実力を出していいのか? とかそういう……」

「どんな魔人だ……違うつて。生徒会の会議か何か脱け出して來たんでしょ? ここに遊んでていいのかっていう意味だよ今のは」

「あたいがいなくたつて問題ねえだろ。ダメだつたら探しに来るだろーし」

追いかけられる前に仕事するべきだつと、誰しもそう思つだらうが高雄はそう言わなかつた。

彼女は昔からそういう人だ。自分が思つたこと、やりたいことを好きにやってきていい。

そしてそれに対する叱責すら楽しんでいる印象である。けれどその実、いざという時には彼女ほど味方になれば頼もしいと思える人間もそうはないだろう。

注意だけはされないよう、最低限のことは 最低限のことしかしない高雄にとつては、少なからず憧れを抱いていた部分ではある。しかし今ではもう諦めた。

自分は自分、彼女は彼女だと。彼の中ではそれでいいといつ」と  
にしている。

「 んじや始めつか。まずタカが『ババ』な

「……すみませんがババ抜きのルールから勉強し直してもらえます  
かね」

「んじやあ『ババ』無しのババ抜きすつか?」

「それもうゲーム違うから……ババ無いから

「 つ『ババ』！ やつぱつこにいた！」

出入り口方面から突如響いた少女の怒号に、二人とも身体を強張  
らせて振り向いた。

静かな室内に雷鳴を走らせ、一人の耳を軽く痺れさせたその女子  
生徒。

彼女はスラリと地に向かつ髪をなびかせ、眉間にシワを寄せた険  
しい表情のまま、彼らのもとへと歩み寄っていった。

「あだだだだあつー?」

榛名が悲鳴　いや、そんなに女の子なものではない。どちらかといえば男らしい痛がり方で、声をあげた。

たつた今入室してきた女生徒に、問答無用で片耳をつねりあげられた為である。

「ハルナあ……すぐ帰つて来るつて飛び出してから何分経つてると思つてるのよ!　しかもこんなところで油売つて……!」

「いっでえよ!　痛えつてのー!」

「ま、まあまあ、ミコキ。そんな怒らなくとも……」

「あんたは黙つてて。これは生徒会内の問題」

「あ、はい……」

眼鏡の奥から向けられるその鋭い眼光と静かな気迫に、高雄は思わずたじろいだ。

高雄と榛名双方にとつて幼少からの幼馴染　天城深雪あまきみゆきは、まさに才女と呼ぶに相応しい女生徒である。

座学であれば成績は常に学年ベストスリー。教師達からの信頼も厚いが、それに毎回応え得るだけの能力を有していると言つていい。高雄と同じ高等部一年生。もなく二年に上がるが、既に生徒会

あつてのブレーンにして頼れる会計役。

知的さを漂わせる銀縁の眼鏡、その奥にはやや鋭い田尻に茶の眼。緑がかつた鈍色のロングヘアには少しの乱れもなく、全ての毛先がスラリと地に向かつて伸びて。髪型の名称こそ榛名と同じだが、両者のそれはまさに性格を髪質に表したかのようである。身長は高雄よりやや低い程度で年頃の女子らしい華奢な体格。しかしその雰囲気からは、榛名とはまた別のタイプで物怖じしない内の強さを感じさせる。

それが彼女という人。その肩書きと成績に外見。名は体をあらわす……ではないが、彼女はまさに『デキる女』の風格を存分に放出していた。

もつとも現在は、その整つた顔立ちも憤怒によつて崩れてしまつてゐたが。

「三年生を送る会での送辞……あんたがいないと練習始められないでしょうが！」

「いだだだっ！ だ、だつてその前の会議が長引きやうだつていうから……！ ハラ減つたし……」

「なら買つもん買つたらすぐに戻つて来なさいよ……！」寄る必要はないでしようが！」

「いやその、暇だつたんで遊びたかったつていうか痛え痛え痛えつて！」

好ましくない形で一気に賑やく。それどころか騒がしくなつた図書室の空氣に、高雄はため息をつくしかなかつた。この2人のや

りとりもまた、いつもの見慣れた光景である。

「とにかくせつをと戻るわよ… 皆待ちくたびれてるんだから」

「だああ、わ、わかつたから耳は放し……いでででえつ！」

「じゃあね。お邪魔したわ」

「あ、ああ……うん」

別れの挨拶にしてはあまりにも鋭い 拒絶にも似たトーンで短い言葉を残し、深雪は図書室の出入口へと向かった。榛名の耳をつねりあげる右手はそのままに。だが唐突にその足は止まった。

「あ そうだ」

何か言い残したのか、それとも思い出したのか。深雪は扉に手をかけた瞬間に首から上だけを高雄へと向けた。傍らで未だに悲鳴を上げている榛名のことは無視したままで。

「この前の話だけど

「……悪いけど、返事は同じだよ」

「……やつ」

「ちいらも拒絶 用件を彼女の口から聞く前に、高雄が断りの返答を返した。その顔色には嫌悪というより、無情。何かを諦めた時の表情が、最も今の彼に近いのかもしれない。

そんな彼に、深雪もまた感情を動かすことなく答える。少なくと

も表面上は。

「自分で　自分の可能性を潰すのね。あなたは」

「……買つてくれるのは嬉しいけど、僕に可能性なんてないよ

「いいわ。また訊くから　行きましょ、ハルナ」

「そ、それはいいけどいかげん耳を放し……あだだだだつ！」

榛名は抵抗するが、ようやく捕まえた獲物をみすみす逃すほど彼女は馬鹿ではない。引きずつて行くのにも近い状態のまま、深雪は図書室を後にした。

「……ふう」

高雄はため息をつき、テーブルと床に散らばったトランプのカードを拾い集めていく。平時の状態に戻つただけであるが、閑散とした図書室内の空気は暖かくもどこか重たいものがあった。深雪の雰囲気が伝染したのだろうかと彼は思つ。

「あ

カードを束にしていく途中で、彼はそれを目にして気付く。榛名が手にしていたハンバーガー入り紙袋が、椅子の上に置かれたままになっていた。大量のそれはジャンクフード独特的の油臭さを未だに放ち続けている。

榛名が取りに来るかとも一瞬考えたが、おそらくそれは無いだろうと思い直した。鷹に捕らえられた小動物のようなものだ。仕事が終わるまでは生徒会室に閉じ込められ、取りに戻つて来れる暇も隙

も『えられないに違いない。

「……仕方ない、か」

かといつてここに置いたままといつのも図書室という場所からして問題があるし、後でグチグチと小言を言われるに違いない。相手はあの榛名なのだ。食べ物の恨みは恐ろしいと言つが、彼女の場合は特に恐ろしいものになるだろう。

高雄は再びため息をつき、ズッシリと重たい紙袋を持ち上げる。現状でこれを届けられるのは自分だけだという事実の前に仕方なく、本当は生徒会室にあまり近付きたくはないという心情は我慢するしかなかつた。

「よ……つとー?」

「あやつ

その接触が起きたのは高雄が図書室の扉を開き、廊下へと出た瞬間である。

周囲への警戒など微塵もしていなかつた彼は、ちょうど図書室の入り口前を通りかかつたらしい小柄な女子生徒に激突してしまつた。彼女が尻餅をつき、手についていた鞄の中身 教科書やノート類が床の上に散らばる。

「あ、ああ……『ごめんつ』

罪悪感と恥ずかしさ、それに焦りが加わつた謝罪を口にし、高雄は廊下に散らばつた彼女の私物を拾つていく。途中で、先に彼女の身体を気遣うべきだつたかと思ったが、何事も無かつたかのように立ち上がりスカートの後ろをはたいている様子を見ると、どうやら

怪我などはしていない様子で一安心した。

「悪かったよ……うつかりしてて」

「いえ。私の方こそ不注意でした」

拾い集めた彼女の私物を手渡し、改めて謝罪の言葉を口にしたところで彼は初めて目の前の少女、その姿を認識した。そして瞬時に目を奪われた。

まだ幼さこそ残しているが、整った顔立ちと艶やかな藍のセミロングヘア。まさに少女と言える小柄で華奢な体格と、どこか神秘的ですらあるその雰囲気。良い意味で、「まるで人形のようだ」という言葉が浮かぶ。

加えて短い言葉ではあったが平坦で……ともすると無氣力ではないかといふ、鈴の音のように透き通り、されど感情を微塵も感じさせないその声もまた、印象的で耳に残るものであった。

「あの」

「え……あ、ああ」「めん……」

彼女に受け取られておきながら、高雄はその手をノートと教科書の束から離していなかつたことによつやく気付いた。その少女に見とれてしまつていたせいだ。

彼は主に恥ずかしさから、顔を赤く染めた。差し出し、渡しておきながら自分は手を離さないなど、相手から見れば滑稽なことこの上ないはずである。

だが目の前の少女は、高雄を不思議がることはせず……どころか、彼が提げていた紙袋の側へとその視線を向けていた。無言のまま、無表情のままで。

「あ……えつと、その。」  
「あはは……」

彼はたじろぎ、「どんな説明をしたらいいものかと考えた。」いくら閑古鳥が鳴いているとはいえ、一応図書室内では飲食禁止なのだ。図書委員である自分が大量のハンバーガーを手にその部屋から出てきたところは、「うまく言い訳をしないと問題にされる可能性がある。聞いた話では紙袋の中の半分程度はチーズバーガーだと、そういうことには至極どうでもよかつたが。

「んと……」  
「……」  
「んと……」  
「……」

緊張と焦りのせいかうまく言葉が見つけられず、じびりもどりになってしまっている高雄を前に、少女はその小さな口を開いて問うた。無表情極まりなく、眉一つ動かすことなく。

「トーストじゃないのですか？」

「……はい？」

これには思わず高雄も聞き返さざるを得ず、呆気にとられた。おそらく十人が十人同じような反応を示すだろう。それほどにその少女が口にした質問の内容は唐突で、予想外で、そして謎に満ち溢れたものであった。

「失礼しました。」ちらりの話です

「あ、ああ……」

失礼であったかどうかすら高雄には判別出来なかつたが、少女はペコリと頭を下げた。姿姿のみならず、その仕草一つすら可愛らしいと言える。表情は相変わらず少しも変わつていなかつたが。

「あ そうだった……」

田の前の少女にまた田を奪われそうになつたとき、自分がなぜ大量のハンバーガー入り紙袋を手に提げてゐるのかを思い出して我に返ることが出来た。

「ぶつかって」めんね。ちょっと急いでるから、これで……

「そうですか。拾つていただきありがとうございました」

「いやいやそんな……それじゃあ」

適當な挨拶を済ませ、その少女と別れた高雄は早足で生徒会室へ向かつた。彼女から最後にお礼の言葉をもらつたが、嬉しさや恥ずかしさよりも戸惑いの方が大きかつた。彼女の荷物が落ちたのは自分が転ばせたためだというのもあるが、無表情で感謝されるというのはおそらく初めての経験だつたためである。

(綺麗な娘だつたけど……)

先ほどの謎な質問など……気になるところは多々あつたが、それ以上に彼女が着用していた制服のことが高雄には気に掛かつていて。見覚えがあり、どこか懐かしい女子の制服。忘れも間違えもしない、あれは中等部の女子制服だ。スカーフの色から察するに、おそらくは中等部三年生……ようするに一つ下の後輩ということになる。だがそうなると、なぜ彼女がここにいるのかといふ次なる疑問が

浮かぶ。

この学園は中等部と高等部で学棟が違い、それぞれで完全に独立している。だから中等部の生徒が高等部の学棟を訪れる必要はないはずだし、その逆もまた然りである。高等部の生徒に知り合いでいるのだろうか。

(……もうこないし)

階段を下りる手前で振り返ってみたが、既に彼女の姿はなかつた。廊下の向こう端まではそれなりの距離があるはずだが、まるで幻でも見ていたかのように綺麗に消え去ってしまった。

「……ま、いいか」

ひとりじじを口にし。それ以上詮索する気も起きず、面倒くさいという気持ちを態度にしたような氣だるせで、高雄は重たい紙袋片手に階段を下り始める。

忘れ物のハンバーガーを届けた先で、食えた様子から泣きそつた勢いで感謝されるとまでは想像していなかつたが。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4681z/>

---

としょコイ。～閉店営業図書室と、集いし若人たち～

2011年12月15日23時02分発行